

## 父、末永國明について



Suenaga Yoshiaki  
末永 義明

父、末永國明は、1922年（大正11年）10月27日、茨城県水戸市で3男3女の長男として生まれた。祖父は、国鉄（現JR）に勤務し後に国鉄水戸駅長を務めた。祖母は社交的であり、教育熱心で父だけでなく近所の子供を集め勉強を教えたりした。父は祖母の気質を受けついでいたように思う。祖母は若くして病に倒れ、長い療養生活を経て亡くなった。父は祖母を大切にし、晩年は祖母との写真を書斎の机の上に置いて仕事をしていた。

父は、水戸市立五軒尋常高等小学校、茨城県立水戸中学（現水戸第一高等学校）を卒業し1940年（昭和15年）、17歳の時に東京に出た。1944年東京高等師範文科3部（英文学）、1947年東京文理科大学英語学英文学専攻を卒業した。東京高等師範で英文学を専攻した理由は話さなかったが、数学も得意であったとのことである。高等師範では生活費が支給されることが魅力であったと話したことがある。兄弟が大学に進学する頃には東京での生活の面倒を見ることになったことから、長男として早く自立したいとの思いがあったのかもしれない。1947年10月に東京都立第四中学校（現都立戸山高校）で教育者としての道を歩き始めた。1949年9月には東京高等師範学校附属中学校教諭となったが、1951年にガリオア留学生として米国ノースカロライナ大学に留学したため2年程の在任であった。1953年から東京教育大学、1976年から埼玉大学、1988年には文教大学で教鞭を取り、1995年3月に文教大学文学部教授の職を終えた、教育者として47年6か月を過ごした。

家庭での父は、夜遅くまで書斎に籠り仕事をしていて休日も休むことはあまりなかった。たまにTVを見るときは時代劇、野球は長嶋巨人、相撲が好きで外国ドラマは好きではなかった。他人の悪口、喧嘩、言い訳が嫌いであり、子どもには言い訳が通じない問答無用の厳しい父であった。子どもたちが成人してからは孫たちとの交流を楽しみ、毎年クリスマスには遠方から自転車に乗りケーキを持って訪ね

てくれた。

父は1951年にガリオア留学生として米国に渡ったが、帰国に際し、オートチェンジャー付きの大型のレコードプレーヤーとラジオを持ち帰った。EPレコードを何枚も重ねて自動的に連続演奏が出来る最新式のものでギルバート & サリバンのオペレッタ「ミカド」やミュージカル音楽を良く聴いていた。また、ブロードウェイでメリー・マーティンが初演を務めたミュージカル「南太平洋」の舞台を見たことも話していた。米国留学は大きな経験で、アメリカ文学、演劇、ミュージカルを専門とする契機となったようである。

東京教育大学では素晴らしい先輩、同僚、教え子に恵まれたが、東京教育大学が消滅するのに立ち会うのは大変な苦痛のようであった。廃校となる最後の日、大学の名前をつけた風船を空に飛ばしたと話した父の姿には母校を失う辛さ、寂しさ、無念の思いがあった。埼玉大学では学部長、附属中学校長を務め、同僚、教え子に恵まれ充実した生活をおくった。また、教育者として最後の勤務場所となった文教大学では文学部教授として父が得意とする英米文学、演劇、ミュージカルなどの授業を受け持ち、楽しい日々を過ごすことが出来た。父は幸せであった。

父は体格も良く、身長も180cm以上あり大病をすることもなかった。病気をしたことがない父の異変は2004年6月に近所の診療所の診断で判明した。



母校のノースカロライナ大学を再訪して

父は周囲に心配をかけたくないとの思いから体調の変化を気づかれないように努力していたようである。専門医の処置を仰ぐこととなったが病状の進行は徐々に早まり、強い薬の副作用のため「2号館で学生達が待っている」という夢をよく見た。教育者として教壇に立ちたいとの情熱はいつまでも失うことは無かった。病の癒しとして車に乗り昔の勤務地を訪ねたが、大塚の旧教育大学跡では車を降りることを拒んだ。悲しい思いが蘇ったのかもしれない。浦和の埼玉大学や越谷の文教大学では充実した幸せな日々が思い出されたようで、雰囲気を楽しみ生氣が回復した様子だった。友人、後輩の皆様のお見舞いには、それまでとは別人のように元気になった。

今年の4月上旬には、末弟の提案により伊豆高原に1泊旅行に出かけた。今年の桜は咲くのが遅く、満開の桜、温泉、美味しい食事に父はご機嫌であった。また来年も来ようと約束したが最後の旅行となった。

体調が悪いときでも、父の母への優しさは変わることがなかった。4月末、父が近くのスーパーに買い物に行くと言い出した。心配になりあとをつけて行くと、母の好物である苺を買って帰る父に出会った。杖をつき歩くことが不自由になっても母に好物の苺を食べさせたいという思いが大きかったようで

ある。父の優しさ、気遣いは子どもや孫たちに対しても同じであった。5月11日、突然の嚥下性肺炎により緊急入院することとなった、回復を信じたが、我慢強い父が見せた苦痛の姿は目に焼き付いて消えることがない。癒しになればと思い、ギルバート&サリバンの「ミカド」、ミュージカル音楽のCDを枕元でかけたが、お見舞いに頂いたミュージカル「南太平洋」の音楽に癒され励まされた。気分がよいときには「魅惑の宵」の音楽が終わると拍手の仕草をすることもあった。50年前のアメリカ留学時に見た初演メンバーによる懐かしい舞台のCDであった。父が亡くなったあと、書齋を整理しているとメモが書き込まれた「南太平洋」の脚本が見つかった、特別の想いがあったようである。父に対し素晴らしい励ましを贈って頂き感謝している。

父は、6月18日の早朝、「魅惑の宵」を聞きながら、家族に見取られ静かに息を引きとった。その日は、偶然にも祖母の命日であった。祖母の亡くなった頃、庭の杏がたわわに実をつけていた。父は、この日を「杏子忌(あんず忌)」と呼び大切にしていた。「杏子忌」は、父を身近に感じる大切な日となった。気遣いに溢れ優しい父、母は生まれ変わることができたらまた父の妻になりたいと言う。私も父の子でありたい。



ご家族に囲まれて  
前列右から2番目が末永國明先生